論理學研究の一課題

上山春平

「私は多年の研究の結果、我々の歴史的行爲的自己の立場からの思惟の形、卽ち歴史的形成作用の論理を明かにし得たと信ずる。…併し私の論理と云ふのは學界からは理解されない。否未だ一顧も與へられないと云つてよいのである。…人は私の論理と云ふのは論理ではないと云ふ。…然らば、私は爾云ふ人に問ふ。論理とは如何なるものであるか。アリストテレスの論理を論理と云ふに何人も異論はなからう。カントは、…論理はアリストテレスに於て完成せられたかに見えると云つた。…併し爾云つたカントその人の超越的論理は已にアリストテレスの論理學ではない。更にヘーゲルの論理卽ち辨證法的論理に至つてはアリストテレスの論理に反するものの如くにも見える。カントの論理やヘーゲルの論理は論理ではないのであらうか。我々は是に於て論理とは如何なるものかを考へて見なければならない。」

これは、西田幾多郎博士の未完の遺稿（絶筆）「私の論理について*」のほぼ全文である。

＊『續思索と體驗以後』・pp. 91-93.

博士が、哲學の傳統のない日本の社會において、私たちが心の底の實感に卽しながら普遍的な哲學的課題の解決に參加できるような道をみつけるのに力をつくしたこと、こうした探究の焦點を論理の問題にしぼつたこと、論理を辨證法的見地からとらえようとしたこと、これらの點に私は深い共感をおぼえる。しかし、天才的發想を天才的形式で表現することをたてまえとするそのロマン主義的學風は受けいれがたい。博士をして、「私の論理と云ふのは學界か

ら理解されない、否未だ一顧も與へられないと云つてよいのである。」と嘆息せしめたのは、こうした學風のせいでもあるのではないか。私は、博士が死の直前まで追求して止まなかつた問題を、私なりの平俗な仕方でとらえなおしてみたいと思う。

一　西洋論理學の成果
――三つの論理學――

西洋の論理學には、基本的にいつて、演繹論理學、歸納論理學、辨證法論理學という三つの系譜がみとめられるように思う。

以下、三つの論理學の成果を簡單に要約しておきたい。

A　演繹論理學の成果

演繹論理學は古代ギリシヤ哲學の發展過程において成立し、(1)アリストテレス系の名辭論理學と、(2)ストア系の命題論理學の二系統に分れた。*

＊　論理式の變項として、一方は名辭をとり、他方は命題をとる。

中世のスコラ論理學は兩方の系統をうけついだが、近代の學校論理學は、主として名辭論理學をとりあつかう。*

＊『ポール・ロワイヤル論理學』（一六六二）を起點とする近代學校論理學の構成については、「現代論理思想の檢討」（東大人文科學研究所・『人文學報』・第六號）という論文でそのあらましを明かにした。

一九世紀の後半に、これら二系統の演繹論理學は、ブールの『論理學の數學的分析』（一八四七）とフレーゲの『概念文字』（一八七九）において、記號計算の體系にくみかえられ、今世紀のはじめに、ラッセルとホワイトヘッドの『數學原理』（一九一〇―一三）において、一つの公理系に統一された。

B　歸納論理學の成果

歸納論理學は、ベイコンの『新オルガノン』（一六二〇）以來、主としてイギリス經驗論の系譜にそつて發展し、ミルの『論理學體系』（一八四三）において、古典的表現を得る。

ロックの『人間悟性論』第四部の蓋然性論、ヒュームの『人間性論』第三部の蓋然性論もしくは因果論は、この論理學の認識論的前提を明かに示している。

一九世紀後半以降、演繹論理學が記號計算の體系に組み變えられた時期に、歸納論理學の推論も、確率（蓋然性）計算の枠内で操作されるように變形されたが、確率概念の解釋をめぐつて、この新しい歸納理論は、(1)確認度（degree of confirmation）理論と(2)頻度（frequency）理論の二系統に分れた。

(1)を代表するものとしては、ケインズの『確率論』（一九二一）、ヴァイスマンの『確率概念の論理的分析』（一九三〇―三一）などがあり、(2)を代表するものとしてはR・フォン・ミーゼスの『確率・統計・眞理』（一九二八）、ライヘンバッハの『確率論』（一九三五）などがある。

右の二系統の統一的把握は實現されていない。

C　辨證法論理學の成果

辨證法論理學はドイツ觀念論の系譜にそつて形成され、一九世紀のはじめに、ヘーゲルによつてその基礎を確立された。

それは、一九世紀の後半から二〇世紀にかけて、(1)マルクス主義論理學と(2)プラグマティズム論理學という二つの道を通つて發展してきた。※

※　この點については、「プラグマティズム論理學の批判的分析」（『思想』・一九五六年五月號）という論文において、やや詳しくのべておいた。

D　三つの論理學の關係

演繹論理學は、紀元前四世紀ころ、ソクラテスからアリストテレスにいたる古代哲學の確立を前提として成立し、歸納論理學は、一七世紀に、當時勃興した自然科學の刺戟をうけて成立し、辨證法論理學は、一九世紀に入つて、フランス革命（一七八九）から二月革命（一八四八）にいたる社會革命と、イギリスを中心とする產業革命の時期に、當時その基礎を確立した社會科學と深い聯關をもつて成立した。*

＊　辨證法論理學と社會科學の關係については、立入つた論證を必要とする。ここでは、假說の形で提案するにとどめる。

演繹論理學が視野を思想の世界（人間の內）に限るのに對して、歸納論理學は思想と外界の事實（人間の外）との聯關をとりあつかい、辨證法論理學は、思想と事實の關係をかえてゆく思想の擔い手（人間）を視野のなかにとりいれる。したがつて、三つの論理學が、それぞれ、思想、自然、人間のコントロールを主要な任務とする哲學、自然科學、社會科學の確立にともなつて理論化されたのは、偶然とは言えない。

演繹論理學が、記號（思想表現の手段）相互の意味關係のみをあつかうのに對して、歸納論理學は、こうした理論を前提としながら、記號體系とその指示對象との關係を分析し、辨證法論理學は、右の二つの論理學を前提としながら、記號と對象と記號主體の三項關係をあつかう。

演繹論理學は、もつとも低次な、つまりもつとも單純で抽象的な論理學であり、歸納論理學は、これを前提としながら新たな要素を導入し、辨證法論理學は、もつとも高次な、つまりもつとも複雜で具體的な論理學として、右の二つの論理學を前提としながら、更に新たな要素を導入する。

西田博士が、アリストテレスの論理を基準にとれば、自分の論理はもとより、カントの超越論的論理やヘーゲルの辨證法的論理さえも論理とは云えまい、と言つたのは正しい。なぜなら、「アリストテレスの論理」によつて代表される演繹論理でもつてより高次な歸納論理や辨證法論理を律することはできないからだ。ただし、私は、このばあい、

カントの超越論的論理を歸納法の正當化の體系、西田博士の論理を辨證法論理の一形態、とみなす。

＊ 私はカントの超越論的論理學を、歸納法の正當化の試みとして理解するC・S・パース、C・I・ルイス、ホワイトヘッドなどの考えを支持する。「いかにして先天的綜合判斷は可能であるか」という超越論的論理學の中心問題は、經驗的事實に依存する綜合命題が、なぜ普遍性と必然性をもちうるのか、という歸納法の正當化の問題に還元できる。

cf. G. H. Von Wright, *A Treatise on Induction and Probability*, p. 20, p. 26; C. S. Peirce, *Collected Papers*, Vol. 2, Parag. 690-691

二　論理學研究における當面の課題

——三つの論理學の統一——

二千數百年にわたる西洋思想史の發展過程において順次に生みだされてきた演繹論理學、歸納論理學、辨證法論理學という三つの論理學が、現在では併存している譯であるが、私はこれら三つの論理學の統一的把握を、これからの論理學研究の一つの重要な課題とみる。

三つの論理學の統一という問題は、まだ一般に明確な形でとらえられているとは言えないが、一九五〇年ころからアメリカとソヴェートを中心に、この問題に深いかゝわりをもつ問題が提出され、討論されてきた。＊

＊ この點については、「哲學の力」（『思想』・一九五四年五月號所載）という論文で指摘しておいた。

それは、ソヴェートにおける辨證法的論理學と形式論理學の關係をめぐる討論と、アメリカにおけるカルナップ（論理實證主義正統派のリーダー）とクワイン（ラディカル・プラグマティズムの立場をとる論理學者）の論爭を中心とする論理實證主義とプラグマティズムの論理思想の對決、をさす。

＊ *Über Formale Logik und Dialektik*, Berlin, 1954.

なお、『思想』三三八號、三六一號、三六四號、三六六號、三六七號、三七二號を參照。

※※ M. G. White, "The Analytic and Synthetic——an Untenable Dualism", in *John Dewey, Philosopher of Science and Freedom*, ed. by S. Hook, 1950.
W. V. Quine, "Two Dogmas of Empiricism", *Philosophical Review*, Vol. LX, 1951.
M. Perkins and I. Singer, "Analyticity," *Journal of Philosophy*, Vol. XLVIII, 1951.
B. Mates, "Analytic Sentences" *Philosophical Review*, Vol. LX, 1951.
R. M. Martin, "On Analytic", *Philosophical Studies*, Vol. III, 1952.

A　ソヴェートにおける論理學論爭

ソヴェートの場合、はつきりと、演繹論理學（形式論理學）と辨證法論理學の關係が問題として提出されている譯だが、これまでの討論の範圍内では、三つの論理學の統一という問題意識に到達するまでには、いくつかの障碍をのりこえねばならないように思う。

第一に、ソヴェートの學者たちは、形式論理學を、ほゞ近代學校論理學の「原理論」の部分（アリストテレス系演繹論理學の近代的歪曲形態）に對應するものとして理解しており、演繹論理學の發展形態としての記號論理學を、視野の外においている。まづ、この偏見から解放されねばならない。

第二に、まことに妙な話だが、辨證法論理學にかんする理解が不明確である。それは「古典」による正當化に熱中して、前むきの探究に熱意をかくためではないか、と思う。形式論理學の研究と同じく、辨證法論理學の研究においても、ソヴェートの哲學者たちは、マルクス主義の本來の精神に反する保守主義によつてつらぬかれている。

第三に、辨證法論理學と形式論理學の關係についての理解が、きわめて不明確である。私の知りえたかぎりでは、今までのところ、何ら實りのある結論はでていない。もつとも、第一と第二の障碍が克服されないかぎり、この障碍を克服することはできない。

二つの論理學の關係について、討論の『總括』は、エンゲルスの權威を支えとして、つぎのように規定している。

「辨證法的論理學の形式論理學にたいする關係は、エンゲルスの深刻な比喩によれば、高等數學の初等數學にたいする關係ににている。*」

＊ *Über Formale Logik und Dialektik*, S. 237.

右の引用文は、『反デューリング論』のなかの、つぎの言葉に據つているものと見られる。

「初等數學、すなわち不變量の數學は形式論理學の限界内を動いている。…微積分學をもつとも主要な部分とする變量の數學は、本質的には數學的諸關係に對する辨證法の適用にほかならぬ。*」

＊『反デューリング論』岩波文庫版・上卷・p. 225.

ところが、エンゲルスは、同じ『反デューリング論』のなかに、つぎのように書いている。

「變量の數學〔高等數學〕の不變量の數學〔初等數學〕に對する關係は、そもそも辨證法的思考の形而上學的思考に對する關係と同じものである。*」

＊ 同書・p. 205.

したがつて、エンゲルスにしたがうかぎり、辨證法的論理學と形式論理學の關係は、高等數學と初等數學の關係に對應し、後者の關係は、辨證法的思考と形而上學的思考の關係に對應する。つまり、辨證法的論理學と形式論理學の關係は、辨證法的思考と形而上學的思考の關係に對應することになる。これこそ、二つの論理學の關係にかんする傳統的なマルクス主義的解釋の基準に他ならない。

周知のように、エンゲルスは、辨證法的思考と形而上學的思考を排他的關係においてとらえ、前者を善玉、後者を惡玉として規定した。* したがつて、右の解釋にしたがうかぎり、辨證法的論理學は善玉、形式論理學は惡玉、ということになる。

＊『反デューリング論』・第一章

本來、一九五〇年以降のソヴェートにおける論理學にかんする討論は、こうした傳統的解釋にもとづく形式論理學の不當な輕視に對する反省が、その主なネライだったのではないか。しかるに、そうした解釋の基準となっている『反デューリング論』の主張が、『總括』によって、討論の到達點として確認されているのだ。文字通り、元のモクアミという他はない。

二つの論理學の關係については、「〔形式〕論理學は辨證法の一モメント、一部分である。*」というバクラッゼ教授の見解を、私は、討論參加者の見解のうちで、もっとも正しいように思う。教授によれば、「認識過程においては生き生きした直觀から抽象的思考への移行が行われ、そこから實踐への移行が行われる。この移行に際して正しい思考が一定の役割を演ずる。この思考の法則や規則が〔形式〕論理學の對象である。從って〔形式〕論理學の對象となるのは〔辨證法論理學の對象としての全〕認識過程における一定の必須のモメントである。**」

* 上掲書・S. 19.

** 同書・S. 17.

この見解は、マルクス主義論理學（認識論）の現在の水準を示す毛澤東の『實踐論』や、この本の前提となっているレーニンの『哲學ノート』の見解と、基本的な點において、一致している、と私は考える。

『實踐論』は、「辨證法的唯物論の認識論」（マルクス主義的論理學）の對象としての認識過程を、感性的認識→理性的認識→實踐、という三段階の發展的くりかえしの過程として規定し、第二段階を、「概念、判斷、および推理の段階」とか「論理的認識」として、つまり形式論理學（正確には演繹論理學）の對象（演繹過程）として、規定している。ところで、右の三段階は、『哲學ノート』における、直觀→思考→實踐という三段階の發展形態に他ならない。

バクラッゼ教授の「辨證法論理學」と「形式論理學」にかんする規定はアイマイであり、全體の立論も説得力を缺

いているが、『總括』が、その基本的な正しさを無視して、これを「無原則的な《中庸》の立場」ときめつけているのはどうかと思う。一般的にいつて、『總括』およびその線に近い報告は、『反デューリング論』の水準を固執して、『哲學ノート』や『實踐論』におけるマルクス主義論理學の發展を見落している。まことに不可解なことだ。*

＊ マルクス主義論理學の發展における『反デューリング論』、『哲學ノート』、『實踐論』などの位置づけについては、Ⅳのβを參照。

β アメリカにおける論理學論爭

アメリカにおける、カルナップとクワィンを中心とする論爭は、こみいつた仕方で、演繹論理學と歸納論理學と辨證法論理學の關係にかかわりをもつと言える。その理由はこうだ。カルナップによつて代表される論理實證主義正統派は、あらゆる命題を、綜合的命題（經驗的事實に依存する）と分析的命題（經驗的事實に依存しない）とに二分する立場に立ち、それぞれの命題の分析の道具として、歸納論理學と演繹論理學を用いる。それに對して、クワィンは演繹論理學（記號論理學）の專門家であるが、プラグマティズム論理學（辨證法論理學の一形態）の見地から、論理實證主義における綜合的命題と分析的命題の二元的把握、綜合的命題の檢證にかんする理論、に反對する。

私は、右の論爭を、基本的には、イギリス經驗論の傳統をうけつぐ論理實證主義の認識論と、ヘーゲル的な辨證法的認識論の經驗論的改造としてのプラグマティズムの認識論の對決とみる。* （歸納論理學がイギリス經驗論の認識論を背景として發展したこと、歸納論理學は演繹論理學を前提し、辨證法論理學は演繹論理學と歸納論理學を前提とすること、を思い起していただきたい。）イギリス經驗論系の認識論は、綜合的命題の眞理性の條件を示す歸納論理學と分析的命題の眞理性の條件を示す演繹論理學の二元的把握を正當化し、辨證法的認識論は、そうした二元的把握を否定して、兩者の統一的把握を正當化する。

＊ この點にかんしては、つぎの論文が參考になる。

A. Gewirth, "The Distinction between Analytic and Synthetic Truths," *The Journal of Philosophy*, Vol. L, No. 14, 1953.

クワインは、カルナップ批判の焦點を、(i)分析的命題と綜合的命題の二元論（dualism）と、(ii)綜合的命題の眞僞を觀察命題（プロトコル命題）の眞僞に還元する還元主義（reductionism）にしぼつた。* 以下、その論點が、辨證法論理學の一形態としてのプラグマティズム論理學の基本的見解に立脚するものであることを、かんたんに論證しておきたい。

* クワインによれば、論理實證主義におけるこうした二つの基本前提は、イギリス經驗における "relation of ideas" と "matters of fact" の二分法、および、あらゆる經驗的知識を單純觀念の結合とみる觀念聯合說（association theory）を起點とする經驗論の傳統的ドグマである。

(i)　まづ、分析的と綜合的の二元論に對する批判。

クワインによれば、分析的と綜合的の區別は、程度の差であつて、一方が思想相互の關係のみを示し、事實には無關係なのに對して、他方は事實にも依存すると考えるのはあやまりだ。どちらも、思想と事實の兩方に依存している。ただ、依存の仕方に程度の差があるだけのことだ。したがつて、論理實證主義者のように、論理學や數學の命題（分析的命題）と常識や經驗科學の命題（綜合的命題）を原理的に區別して、前者をアプリオリだ、というのはまちがつている。論理學や數學の命題は、ただ經驗科學や常識の命題にくらべて、事實とより間接的な關係をもつだけであつて、事實と全く關係をもたぬ譯ではない。したがつて、當然、事實にもとづく修正をまぬがれることはできない。事實とより直接的な關係をもつ命題にくらべて、その修正のテンポがはるかにのろいだけのことだ。

(ii)　つぎに、還元主義に對する批判。

このドグマは、右の二元論と深い關係がある。なぜなら、論理實證主義においては、綜合的命題と分析的命題を原

理的に區別したうえで、綜合的命題を觀察命題に分解し、それを事實とつきあわせ、その眞僞をもとにして元の綜合的命題の眞僞をきめるからだ。論理實證主義の一つの支柱となつているこの驗證理論は、分析的命題と綜合的命題の二元論が否定されるかぎり、維持できない。分析的命題と綜合的命題は、互にからみあつた總體として事實につきあわされ驗證されるべきだ。

以上の批判の觀點は、パースとデューイによつてプラグマティズム論理學の基本原理とされた「探究連續體の原理」(the principle of the continuum of inquiry) に立脚している。

この原理は、(i)探究過程と他の人間活動の過程との縱の連續性と、(ii)探究過程相互の横の連續性を主張する。デューイは、「探究連續體の原理」のこうした二側面を、それぞれ、つぎのように規定している。

(i) 「探究のはたらきと生物學的なはたらきとは連續していて、その間に切れ目はない。*」

(ii) 「探究の成果は、すべて、それに先行する探究、およびそれに後續する探究から切りはなされたものではない。**」

* *Logic*, p. 19.

** ibid. p. 264.

(i) 分析的と綜合的の二元論に對するクワィンの批判は、探究過程の縱の連續性の原理を前提とする。

デューイは、この原理にもとづいて、探究過程の生物學的、ならびに文化的母胎、を問題とした。これは、探究の活動を、生物學的ならびに文化的な全人間活動の一環として、つまり、概念や命題を道具として用いる一種の人間活動として、實踐の見地からとらえる着眼にもとづいている。こうした見地にたつとき、あらゆる概念や命題は、生活(廣い意味における)の必要をみたす目的をもつ人間活動の手段とみなされ、その價値(眞僞、有效無效など)は、行動の成果によつてテストされねばならない。つまり、經驗のテストをまぬがれる概念や命題は存在しない。こうし

て、論理學や數學の公理や定理をふくめて、あらゆる命題は、究極において、事實とかかわりをもつ經驗命題＝綜合的命題と解される。したがつて、分析的命題と綜合的命題の二元論は成立たない。

(ii) 還元主義にたいするクワィンの批判は、探究過程の横の連續性の原理を前提とする。

この原理にしたがえば、どんな命題もある探究過程の成果として、先行する探究過程の成果によつて規定され、この關係は無限にくりかえされる。したがつて、還元主義の想定する觀察命題（直接命題、プロトコル命題）のような絶對的起點としての命題は認められない。「デューイは、所與（data）を、知識の出發點としてみとめない。探究の過程があつて、…その過程は、生涯を、いな一つの文化的社會の歴史をさえつらぬいて連續している。*」というラッセルの指摘は、デューイ論理學の核心をついている。「所與」（論理實證主義においては觀察命題、プロトコル命題、直接命題などとよばれる）を出發點とするラッセルは、カルナップと基本的には同じ見地にたち、「所與」のかわりに「探究連續體」を出發點とするクワィンは、デューイと同じ見地に立つ。**

* B. Russell, "Dewey's New Logic", *Philosophy of John Dewey*, 1939, p. 179.

** ラッセルのいう「所與」を、デューイは「直接知識」とよび、『論理學』・第二部・第八章を、これの批判に當てている。

三　解決の道

私は、辨證法論理學の見地から、三つの論理學を統一的にとらえることができるのではないか、と考えている。しかし、そのためには、三つの論理學の認識論的基礎を明かにすること、それを前提として、歸納論理學における確認度理論と頻度理論の統一的把握、辨證法論理學におけるマルクス主義論理學とプラグマティズム論理學の統一的把握、を實現すること、が必要だ、と考えている。ここでは、歸納論理學の統一にかんする問題は一應省略して、マルクス主義論理學とプラグマティズム論理學の統一にかんする問題を檢討してみたい。そのためには、まず二つの論理

學の成果を明確にとらえておかねばならないと思う。

A　プラグマティズム論理學の成果

パース（一八三九―一九一四）とデューイ（一八五九―一九五二）が、プラグマティズム論理學の基礎を確立したのは、南北戰爭（一八六一―六五）の直後から今世紀のはじめにかけてのことだ。

この戰爭によつて、アメリカのブルジョアジーは政治的ヘゲモニーをにぎり、産業の機械化と西部開發を急速に推進する。

そうした時期に、ピュリタニズムと近代産業の中心地であるニュー・イングランドに、宗教的傳統の重壓にさからいながら、ブルジョア的合理主義を支えとする科學的實驗精神をつらぬこうとするプラグマティズム運動が擡頭した。

この運動は、アメリカ思想史の流れのなかでは、エマスンを中心とするコンコードの超絶主義（transcendentalism）グループと、ハリスを中心とするセント・ルイスのヘーゲル主義グループに代表されるロマン主義的哲學思想の克服をめざす運動として評價される。したがつて、すくなくとも、この點にかんするかぎり、ヨーロッパにおいてマルクス主義がヘーゲル哲學に對して果した役割と共通な特徴をもつ。

こうした思想運動の過程で、パースとデューイは、ヘーゲル論理學の經驗論的改造をなしとげる。

パースは、カントの超越論的論理學の批判から出發し、アリストテレス論理學、スコラ論理學、數學的論理學などの演繹論理學の研究と、ミルやベンなど歸納論理學の研究を媒介として、一八九〇年代に、ヘーゲル論理學に急速に接近する。*

＊　パース論理學とヘーゲル論理學の關係については、私の論文、「數學的論理學と辯證法論理學の關係――チャールズ・パースの論理思想をめぐつて」（京大人文科學研究所創立二十五周年記念論文集・一九五四）を參照していただきたい。

デューイは、ヘーゲル論理學の研究から出發し、ハミルトン一派の形式論理學とミルやベンなどの歸納論理學に終始對抗しながら、ダーウィニズムと實驗心理學の研究を媒介として、一八九〇年代に、やつとヘーゲルの思辨的方法から足を洗い、道具主義的論理學の立場に到達する。*

＊　デューイ論理學とヘーゲル論理學の關係については、つぎの本を參照。
M. White, *The Origin of Dewey's Instrumentalism*, 1943.

私の研究の結果によれば、プラグマティズム論理學の基本的な特質は、つぎのように要約できる。すなわち、《知覺↓思想↓行動》という認識過程のサイクルを、實踐の場において、總體として、とらえ、こうした見地から、《知覺↓思想》、《思想↓思想》、《思想↓行動》という三段の認識過程における論理的推論形態を、それぞれ、《アブダクション（Abduction）》、《ディダクション（Deduction）》、《インダクション（Induction）》、として規定し、各段階の推論過程を全過程との聯關において分析すること。*

＊　「プラグマティズム論理學の批判的分析」（『思想』・一九五六年五月號）を參照。

パースによれば、《アブダクション》とは、現象の觀察を出發點とし、假說の發見をへて、假說の定立にいたる假說形成（新しい着想、新しい理論の發見）の過程、《ディダクション》とは、《アブダクション》の提供する假說を論理的推論の前提命題に組みかえ、そこから論理的に可能な結論をひきだす過程、《インダクション》とは、《ディダクション》によつてひきだされた論理的結論を、事實とつきあわせることによつて、《アブダクション》によつて提供された假說の眞僞（眞理性）を檢證する過程をさす。つまり、「アブダクションは、假說を形成する過程であり……ディダクションは、そのヒントにもとづいて豫見をひきだし、インダクションは、この予見をテストする。*」

＊　パース全集・第五卷・第一七一節。

デューイは、『論理學』において、認識（探究）過程を、㈠問題狀況、㈡問題設定、㈢假說、㈣推論、㈤實驗、㈥

保證づきの言明、という六段階に分けているが、㈠、㈡、㈢はパースの《アブダクション》、㈣は《ディダクション》、㈤、㈥、は《インダクション》に當る。

プラグマティズムの論理學において、認識過程の第二段階をなす《ディダクション》は演繹論理學の對象に當り、第三段階をなす《インダクション》は歸納論理學の對象（ただし頻度理論のばあいにかぎる）に當る。したがつて、プラグマティズム論理學は、演繹論理學と歸納論理學を、そのモメントとしてふくむ、といえる。

B　マルクス主義論理學の成果

マルクス（一八一八―八三）は、七月革命（一八三〇）から二月革命（一八四八）にいたるプロレタリア革命運動の成立期に、この運動の指導に從事しながら、ヘーゲル論理學の批判を媒介として、マルクス主義論理學の基礎をつくつた。

『經濟學・哲學ノート』（とくに「ヘーゲル辨證法および哲學一般に對する批判」）、『ドイツ・イデオロギー』（とくに「フォイエルバッハ」論）、『フォイエルバッハについてのテーゼ』、はマルクス主義論理學の起點として注目すべき業績である。

私たちは、マルクス主義論理學の成果を評價するに當つて、次の諸點を確認しておく必要があると思う。

(1)マルクス主義では、その科學基礎論を《辨證法的唯物論》とよび、社會過程の分析にたいするそれの適用を《史的唯物論》とよび、さらにその適用を社會過程の一部としての思考過程の分析に限る場合、これを《辨證法的唯物論の認識論》とよぶ。

マルクス主義論理學は、この第三の部門にあたる。

(2)マルクス主義の理論體系の形成は《史的唯物論》（社會科學基礎論）から着手された。

マルクスは、まづ、『ドイツ・イデオロギー』（一八四五―四六執筆。一九二八發行）において、社會過程（歴史）を、

經濟過程と政治過程と思考過程の相互關係からなる總過程として分析したが、それはスケッチの範圍をでなかつた。

マルクスが、一應、完成したのは、經濟過程の理論（『資本論』）のみである。

(3)エンゲルスは、『反デューリング論』（一八七八）において、自然過程、社會過程、思考過程をつらぬく一般法則の科學としての《辨證法的唯物論》の構想を明かにした。

(4)思考過程の法則の科學としての《辨證法的唯物論の認識論》（マルクス主義論理學）を、はじめて主題的にとりあげたのは、レーニンの『哲學ノート』（一九一四―一六執筆）である。

(5)毛澤東は、『實踐論』（一九三七）において、レーニンの仕事を繼承發展し、マルクス主義論理學の體系的敍述にはじめて着手した。

以上の諸點を確認したうえで、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』、エンゲルスの『反デューリング論』、レーニンの『哲學ノート』、毛澤東の『實踐論』、の四冊の本について、マルクス主義論理學の成果を檢討してみたい。

a　『ドイツ・イデオロギー』

マルクスは、この本のはじめの「フォイエルバッハ」論で、社會過程の理論（《史的唯物論》）の大要を示した。そこでは、論理學の對象としての思考過程が、社會過程の一モメントとして、他のモメント、つまり經濟過程や政治過程との相互關係において分析されている。言いかえれば、認識の問題（マルクス主義ではこれを客觀的世界の「反映」の問題として理解する）が、經濟的、政治的實踐の問題とむすびつけて研究されている。※

※　この本は、「現實的に活動している人間から出發し、かれらの現實的な生活過程のイデオロギー的な反射および反響の發展をも敍述する。」（岩波文庫）

b　『反デューリング論』

エンゲルスは、この本の序論と哲學篇で、自然過程、社會過程、思考過程をふくむ廣い意味の自然過程の理論（《辨

證法的唯物論》）を究明し、論理學を、思考過程の科學として規定した。

『ドイツ・イデオロギー』によれば、思考過程は社會過程の一モメントだから、思考過程の科學としての論理學は社會過程の科學としての《史的唯物論》を前提とする。そして、《史的唯物論》は《辨證法的唯物論》を前提とする。

この本のマルクス主義論理學に對する貢獻は、(1)論理學の對象をはつきり規定した點、(2)マルクス主義理論體系における論理學の位置を明かにした點、この二點である。

c 『哲學ノート』

レーニンは、この本のなかのヘーゲル論理學にかんするノートにおいて、ヘーゲル論理學のマルクス主義的なよみ方を示しながら、マルクス主義論理學（《辨證法的唯物論の認識論》）の對象と方法の分析を試みた。

ヘーゲル論理學は、存在論、本質論、概念論の三部門からなつているが、レーニンは、概念論の最後の部分に當る理念論の分析に、もつとも力をそそいでいる。*

* ヘーゲルの『大論理學』では、全體の約 1/10 のスペースしか割當てられていない理念論に、レーニンはヘーゲル論理學にかんするノートの約 1/4 のスペースをさいている。

レーニンは、ヘーゲルの理念論における、《生命→認識（理論的理念→實踐的理念）→絶對的理念》という理念の運動過程の敍述から、客觀的世界の「反映」にはじまり、實踐による「檢證」にいたる認識過程の法則を學びとる。*

* ヘーゲルによれば、「理念の第一の形態は生命であり……第二の形態は、……認識としての理念であり、この認識は理論的理念および實踐的理念という二つの形態をとつてあらわれる。認識の過程は、その結果として、區別によつて豐かにされた統一を回復するが、これが理念の第三の形態、したがつて絶對的理念である。」（『哲學ノート』岩波文庫版第一分册一八七―八頁）レーニンは、この敍述をつぎのようにとらえなおす。「生命は腦髓を生みだす。人間の腦髓のうちに自然が反映される。人間は、

その實踐と技術のうちでこの反映の正しさを檢證し適用しながら、客觀的眞理に到達する。」（同一八八）つまり、レーニンは、ヘーゲルにおける「生命」→「認識」（理論的理念）の過程を「反映」の過程、「認識」（實踐的理念）→「絶對的理念」の過程を「檢證」の過程とみる。

『哲學ノート』の貢獻は、ヘーゲル論理學の成果をマルクス主義的見地から學びとりながら、論理學的分析の焦點を、認識過程における「反映」と「檢證」の問題にしぼつた點にある。

したがつて、『哲學ノート』の全成果は、つぎの言葉に要約されているといえる。

「生き生きした直觀から抽象的思考へ、それから實踐へ。これが眞理の認識の、すなわち、客觀的實在の認識の、辨證法的な道すじである。」（一四三）

《直觀→抽象的思考》の過程は「反映」の過程、《抽象的思考→實踐》の過程は「檢證」の過程に他ならない。*

＊　レーニンが、「反映」の過程を《直觀→抽象的思考》の過程としてとらえている點は注目に値する。彼は言つている。「認識は人間による自然の反映である。しかし、それは單純な、直接的な、全體的な反映ではなくて、一連の抽象からなる過程であり、諸概念や諸法則などの定式化、形成からなる過程である。……人間は、抽象や概念や法則や科學的な世界像などをつくりながら、たえずそれに接近していくにすぎない。*」（一六〇）

d　『實　踐　論』

毛澤東は、この本において、レーニンの明かにした《直觀→抽象的思考→實踐》という認識過程を、《感性的認識→理性的認識→實踐》という形でとらえなおし、マルクス主義論理學の體系的敍述のいとぐちをつくつた。

『實踐論』は、基本的には、『哲學ノート』の成果を繼承するものと言えるが、後者の利用できなかつた『ドイツ・イデオロギー』の成果を吸收している點で、明瞭な前進を示している。*

＊　『哲學ノート』が執筆されたのは一九一四年から一六年にかけてであり、『ドイツ・イデオロギー』が公刊されたのは一九二八年である。

つまり、『哲學ノート』が「實踐」のモメントを、主として、「檢證」の過程の條件としてとらえたのに對して、『實踐論』はそれを「反映」と「檢證」をふくむ全認識過程の基本條件としてとらえている。『實踐論』は、プランの段階をでないが、ともかく、マルクス主義論理學の最終の成果であり、現在の水準を示すものとみてよいだろう。

C　マルクス主義論理學とプラグマティズム論理學の統一

マルクス主義論理學の最終の成果としての『實踐論』と、プラグマティズム論理學を代表するパースの探究理論は、つぎの點において一致する。つまり、認識の過程を實踐（目的をもつた行動）の見地からとらえる點、またこうした見地にもとづいて、認識過程を、(1)實踐から認識への移行過程、(2)理論的認識の過程、(3)認識から實踐への移行過程、という三段階に分けて考える點。

(1)、(2)、(3)、は、『實踐論』における(1)感性的認識、(2)理性的認識、(3)實踐、に當り、また、パース論理學における(1)アブダクション（《知覺→思想》過程の推論）、(2)ディダクション（《思想→思想》過程の推論）、(3)インダクション（《思想→行動》過程の推論）にあたる。*

＊　デューイの『論理學』における探究の六段階は、さきにのべたように、パースの『論文集』における探究の三段階に還元できる。しかも、パースの成果の方が、デューイの成果よりも、論理學的にみて水準が高い。

なお、私は、『實踐論』の三段階とプラグマティズム論理學の三段階が、ぴったり一致する、などというつもりはない。たとえば、兩者の第一段階をくらべてみても、《感性的認識》がたんに「感覺と印象の段階」（國民文庫版・p. 13）にすぎないのに對して、《アブダクション》は感覺と印象を出發點として假說の形成にいたる過程をさす。『實踐論』では、假說の形成は、「感覺し印象したものを、實踐のなかでいくどとなくくりかえす」うちに、「認識過程での一つの突然の變化がおこり、概念がうまれる」（p. 13）と說明されている。そして、こうした「概念」の成立は、《理性的認識》の出發點としてとらえられる。つまり、假說の形成は、パース論理學では認識過程における第一段階の終點とみなされるのに對して、『實踐論』では、それは、第二段

階の起點とみなされる。ただし、いづれにしても、假說の形成が、第一段階と第二段階の轉換點としてとらえられている點では一致している、とも云えよう。また、パースの《インダクション》と『實踐論』の《實踐》は、いづれも理論的認識の行動による檢證の過程をさすが、前者がそれを推論の一形態として形式的にとらえているのに對して、後者はそれを認識過程の一モメントとして內容的にとらえている。同じことは、《アブダクション》と《感性的認識》、《ディダクション》と《理性的認識》についても言えるように思う。

私は、かつて、つぎのようにかいた。「プラグマティズム論理學の基本的な特質は、認識過程を《知覺→思想→行動》というサイクルでとらえる認識論に立脚して、論理的推論過程を《アブダクション→ディダクション→インダクション》というサイクルでとらえ、各段階の推論過程を全過程との聯關において分析する點にある。*」また、『實踐論』には、つぎのようにかいている。「感性的認識から能動的に理性的認識へ發展させてゆくこと、また理性的認識にもとづいて、能動的に革命的實踐を指導して主觀的な世界と客觀的な世界とを改造すること、實踐、認識、再實踐、再認識という形で、この循環往復を無窮にくりかえしてゆくこと。そして、實踐と認識が循環するごとに、その內容が一段と高度のものへすすんでゆくこと。これが辨證法的唯物論の認識論の全部である。」(p. 36)

＊「プラグマティズム論理學の批判的分析」・p. 6.

右の二つの引用文は、ヘーゲル論理學を出發點とし、プラグマティズム論理學とマルクス主義論理學という二つのコースを通つて發展してきた辨證法論理學の最終の成果を要約している。

それにしたがえば、辨證法論理學の基本的特質は、認識（テオリア）の問題を實踐（プラクシスもしくはポイエシス）の問題ときりはなさないで兩者を統一的にとらえる點、云いかえれば、實踐の見地から認識の問題をとりあつかう點、にある、といえるように思う。こうした觀點から、認識過程は、《知覺→思想→行動》もしくは《感性的認識→理性的認識→實踐》というサイクルでとらえられる。比喩的な言い方をすれば、《知覺》もしくは《感性的認識》は、事實（現實）の世界から思想（觀念）の世界への入口であり、《行動》もしくは《實踐》は、思想の世界から事

實の世界への出口である。

演繹論理學は、二つの世界を遮斷する見地に立つて、《思想→過程》の論理を追求し、歸納論理學は、イギリス經驗論系の認識論を前提として、事實の世界から思想の世界への入口を開き、《知覺→思想》過程の論理を追求する。* これに對して、辨證法論理學は、二つの世界の交流を前提として、《知覺→思想→行動》過程の論理を究明する。したがつて、辨證法論理學の對象は、演繹論理學や歸納論理學の對象を、そのモメントとしてふくむ、ということができる。私が、さきに、「辨證法論理學の見地から、三つの論理學を統一的にとらえることができるのではないか、と考えている。」といつたのは、こうした事實を根據としている。

（了）

＊ これは、歸納論理學のうち確認度理論には當てはまるが、頻度理論には當てはまらない。頻度理論にしたがえば、歸納的推論とは《思想→行動》過程の論理であり、それはまさしくプラグマティズム論理學における《インダクション》に當る。この《インダクション》は、《ディダクション》（《思想→思想》過程の論理）や《アブダクション》（《知覺→思想》過程の論理）を前提としているので、辨證法論理學と同じ見地に立つ認識論を必要とする。頻度理論と辨證法論理學の關係は、今後の重要な研究テーマの一つだと思う。

（筆者　京都大學人文科學研究所〔西洋部・思想史〕助教授）

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

A Project for Unifying the Three Types of Logical Theory

By Shumpei Ueyama

My persistent interest throughout my recent logical inquiry has been directed to the formation of a theory which will be capable of unifying the three types of logical theory, i. e., deductive, inductive, and dialectic. This paper is my first approximation to such a unified theory. It consists of the following three parts:

1) In the first part, I have analysed summarily the history of western logical thoughts and pointed out the logical and historical relations among the three types above mentioned.

2) In the second part, I have refered to the logical discussion done independently of each other, the one in the U. S. A. concerning the so-called "two dogmas of empiricism" (analytic-synthetic-dualism and reductionism), and the other in the U. S. S. R. concerning the relation between formal and dialectic logic. In these two series of debates I have sought a clue to a unified theory of logic.

3) In the final part, I have proposed my own project for unifying the three types of logical theory. In order to lay the foundation of a unified theory from the point of a renewed dialectic logic, I have examined two developed forms of it, i. e., the pragmatist and the Marxist logic.